

琉球大学教職大学院

学校における実習の手引き

平成 30～31 年度実習生用



実習	実習校	担当教諭
課題発見 実習Ⅰ	琉球大学教育学部附属小学校〔 年 組〕	
	琉球大学教育学部附属中学校〔 年 組〕	
	特別支援学校〔 沖縄盲学校 〕	
	特別支援学校〔 沖縄ろう学校 〕	
	特別支援学校〔 〕	
課題発見 実習Ⅱ	学校〔 年 組〕	
	学校〔 年 組〕	
インターン 実習	学校〔 年 組〕	
課題解決 実習	学校〔 年 組〕	

琉球大学大学院教育学研究科専門職学位課程「高度教職実践専攻」 平成 30 年度入学		
フリガナ		学籍番号
実習生 氏名		
大学院指導教員名		教育実習委員名

平成 30 年 4 月

琉球大学大学院教育学研究科

専門職学位課程「高度教職実践専攻」教育実習委員会

目 次

第1章 教職大学院 学校における実習のねらいと概要

1 実習のねらい	1
2 実習の概要	1
3 実習の目標	2
4 実習期間、内容、実習受入校、配置計画、実習単位等	5
5 実習の進行計画	6

第Ⅱ章 実習の内容

1 課題発見実習Ⅰ(附属小・中学校・特別支援学校等)	7
2 課題発見実習Ⅱ(連携協力校等)	9
3 課題解決実習(勤務校・連携協力校等)	12
4 インターン実習(連携協力校等)	15
5 実習のイメージ(2年間)	17
6 連携体制の全体組織	18

第Ⅲ章 実習上の留意点

平成30年度教職大学院実習連携協力校一覧	19
評価表の活用と必要事項の記入について	20

附 録

課題発見実習Ⅰ・Ⅱに共通する資料	21
課題発見実習Ⅰに関する資料	25
課題発見実習Ⅱに関する資料	29
インターン実習に関する資料	38
課題解決実習に関する資料	43
琉球大学教職大学院教育実習に関する問い合わせについて	48

第 I 章 教職大学院 学校における実習のねらいと概要

1 実習のねらい

教職大学院では、社会のニーズに応える高度専門職業人の養成に特化し、学校現場の諸課題を解決できる高度な専門性と実践的指導力を備えた教員養成を目的としている。

このような教員養成を行うため、授業では、学校現場における様々な課題や現状を客観的に捉え、理論的に分析・把握し、それを実践に結びつけることのできる高度な専門性を養うことを目的としている。そして、学校における実習では、授業で培った能力をさらに確かなものとするとともに、学校現場での諸課題を解決できる高度な実践的指導力の向上をねらいとする。

2 実習の概要

教職大学院のねらいにそって、学校における実習を課題研究実習と位置づけ、1年次に課題発見実習（課題発見実習Ⅰ・課題発見実習Ⅱ）を、2年次に課題解決実習を行う。

（1）実習の概要 ※2年間で400時間の実習

		実習名称	単位	実習校	実習期間	期間	備考
1年	前期	課題発見実習Ⅰ	2	附属小・中学校・特別支援学校	週1回8時間 ×10日間	4月下旬～ 7月上旬	※実習毎に 大学教員を 配置する。
	後期	課題発見実習Ⅱ（1回目）	4	連協 協力校	2週間連続 (8時間×10日 間)×2回	9月中旬	
課題発見実習Ⅱ（2回目）		2月頃					
2年	前期	課題解決実習	4	勤務校または連携協力校	8時間×20日 間（実習校と 調整して随時 設定する。）	4月下旬～ 11月末	
	後期						
		実習合計単位数	10				

※ 学卒院生に対して、2年次前期に選択科目として「インターン実習」がある。

（選択2単位：週1回8時間×10日間）として連携協力校において実習する科目がある。

※ 課題解決実習そのものと課題研究Ⅲ・Ⅳでは、特定時間帯（例年火曜日の午後）に大学院に戻って実習での取組に対して省察を行うことがある（職専免扱い）。

（2）「課題発見実習」の課題とは

本実習での課題とは、以下の二点をさす。

- ① 学校現場での諸課題に関する院生各自の課題研究テーマとしての課題
- ② 全ての教員にとって必要な教科指導や学級経営、児童生徒指導などの力量に関する院生各自の課題

課題発見実習では、附属小学校・中学校や連携協力校（公立の小・中学校・高校）の教育実践を客観的に観察したり、実践に参加したりしながら、自己の教育実践を省察し、相対化することに

より、①課題研究のテーマや②全ての教員にとって必要な教科指導や学級経営、児童生徒指導等の各自の課題を明確にする。

課題解決実習では、課題解決のための対応策を企画・立案し、実践する。さらに、実践検討会を通して、自己の実践を評価・再考察し、次への実践へとつなげる。また、課題研究テーマに関しては、実習時間外に開講される授業「課題研究」と連動し、研究を深め、最終成果として、研究実践報告書をまとめ、発表する。

3 実習の目標

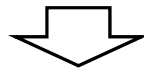
(1) 教職大学院の目標

沖縄県における教育の諸課題に対して、問題や課題を自ら捉え、深め、解決策を策定し、行動を起こし、その結果を振り返り、次の思考や行動につなげる力としての「合理的・反省的思考力」を中核とした高度な専門性と実践的指導力を備えた教員を養成する。



(2) 養成する三つの力

「学習指導力」・「生徒指導力」・「組織運営能力」



(3) 実習での目標

大学院での学修成果に基づいて教育課題に基づく研究課題に対して解決策を提案し、実践に結びつける実践的指導力の向上をめざす。

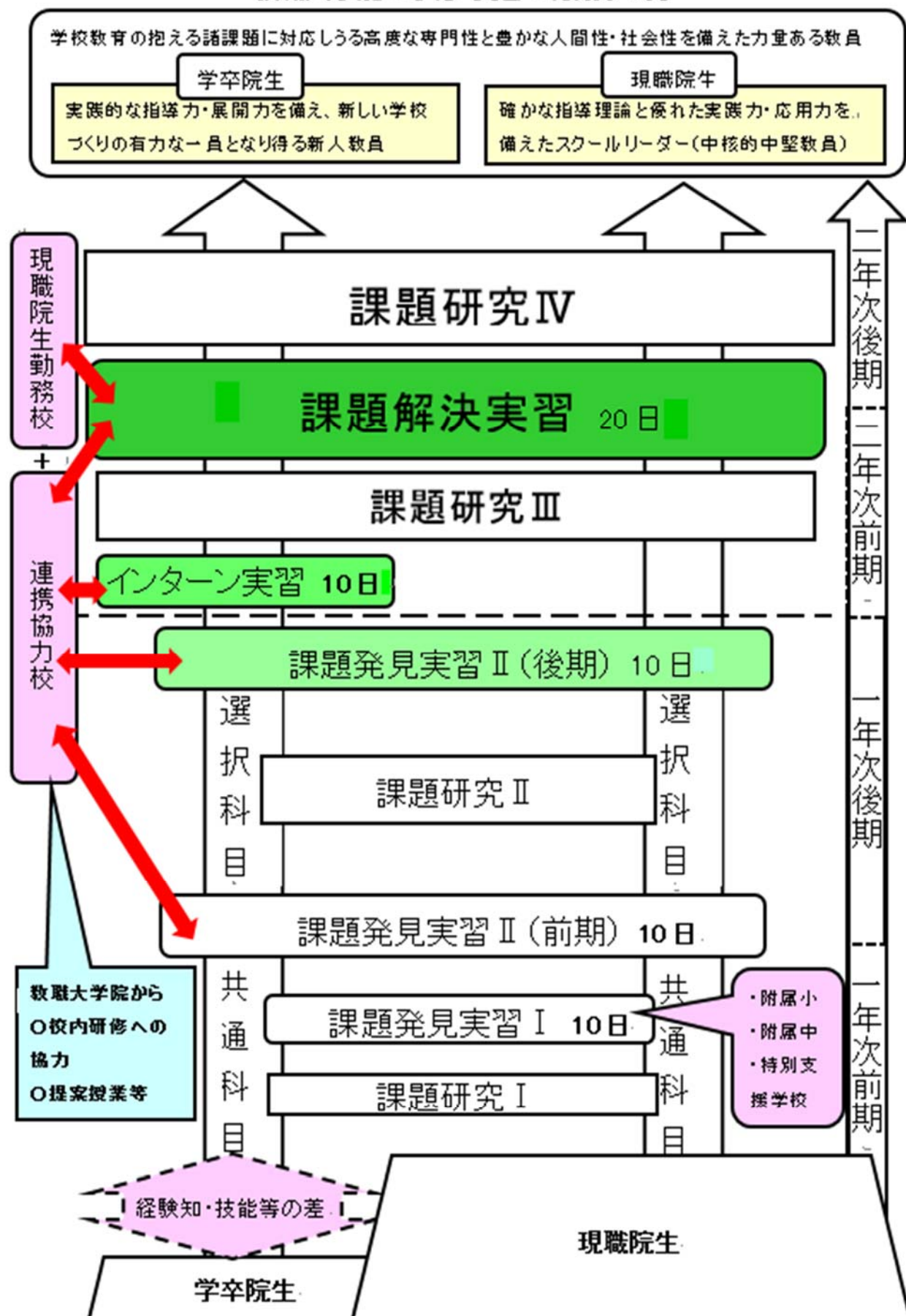
① 現職教員

体系的な「実習」及び「課題研究」の授業を通して、学校における課題を自ら発見し、それに対して、単なる経験的な実践知だけでなく、理論的な観点も取り入れ課題を分析し、対応策を考え、実践し、それを評価・再考察し、次への実践へとつなげていくといった高度な実践的課題解決能力を修得する。そして、学校現場の諸課題を他の教員と協働して解決できるリーダー的存在となることを目標とする。

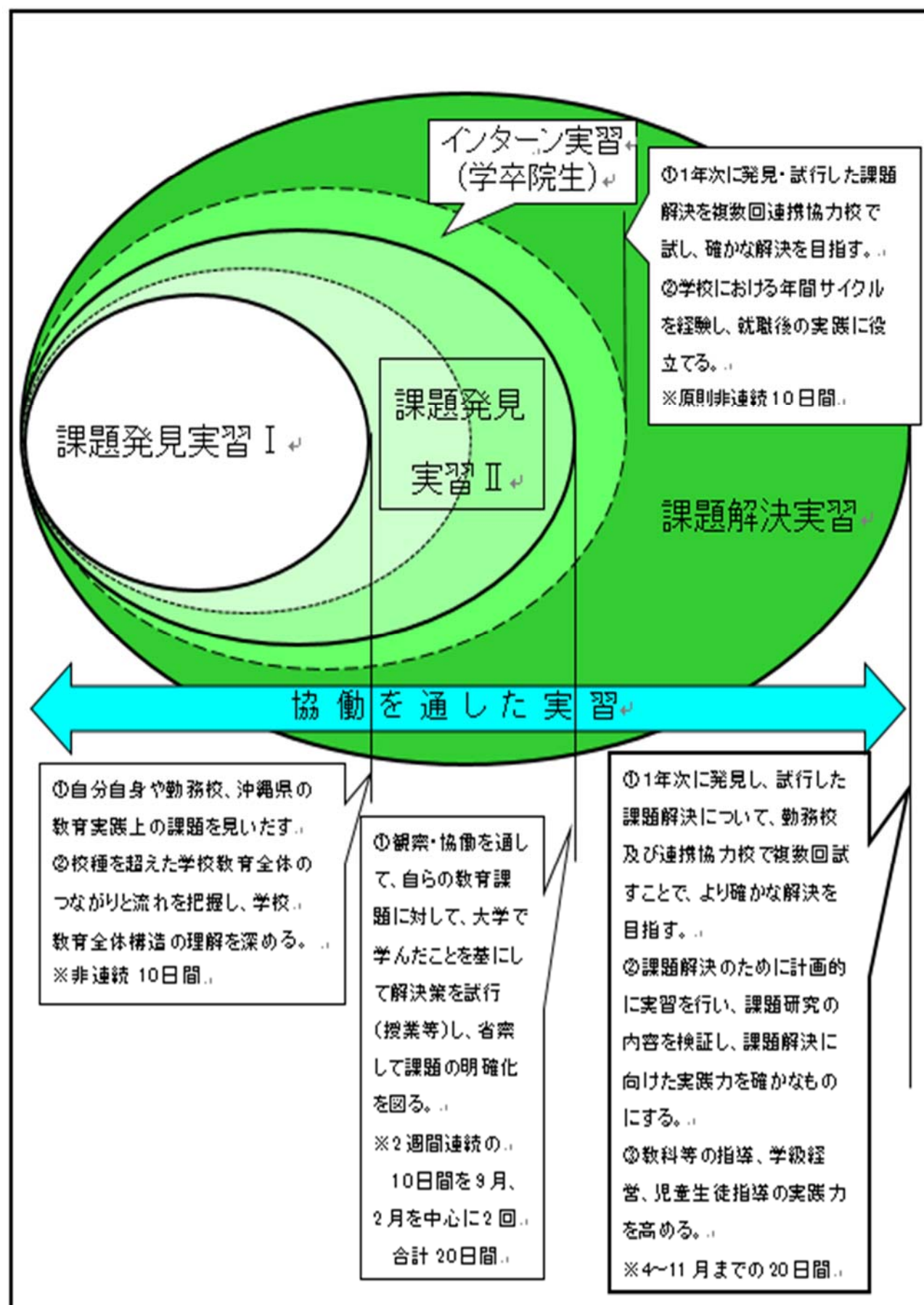
② 学卒院生

体系的な「実習」及び「課題研究」の授業を通して、学校における課題を自ら発見し、それに対して、理論と実践の両側面から、課題を分析し、対応策を考え、実践し、それを評価・再考察し、次への実践へとつなげていくといった高度な実践的課題解決能力を修得する。そして、学校現場において即戦力として活躍でき、学校現場の諸課題の解決に確実に貢献できる新しい学校づくりの有力な一員になることを目標とする。

教職大学院の学修・実習で育成する力



協働を通じた実習



4 実習期間、内容、実習受入校、配置計画、実習単位等

【実習計画表】

	実習期間	実習校	配置計画	実習時間	単位
課題 発見 実習 I	1年次前期 5月9日(水) ～ 6月22日(金)	附属小学校(3日) 5/18、31、19 附属中学校(4日) 5/9、19、26 6/16、22 特別支援学校(3日)	院生15名を2～3名の 実習班に分け、7 班程度を編成して 配置する。小、中学 校、特別支援学校を 観察する。	4月～7月の10日間 8時間×10日間 =80時間 ・事前事後指導を含 む。	2
課題 発見 実習 II	1年次前後期 ※9月中旬以降 と2月頃を目処 に具体的日程 は、別表によ る。	連携協力校 ・中城村立中城南 小学校 ・宜野湾市立普天 間第二小学校 ・宜野湾市立普天 間中学校 ・沖縄市立美東中 学校 ・普天間高校 ・中部商業高校 ・西原高校	原則として、2名 からなる実習班を 編成し、実習班ごと に各2校で実習す る。 実習校2校には、 同一校種で規模が 異なる学校とする。 ※養護教諭、栄養教 諭等は校種が異な る場合がある。	・実習校 1校につき2週間連 続、10日間を2回。 (1校につき80時間 ×2校=160時間) ・事前事後指導を含 む。(合計160時間)	4
イン ター ン 実 習	2年次前期 4月初旬～中旬 ※学卒院生の 選択科目。課題 解決実習に連 続する。期間は 暫定。	連携協力校	原則として1年次後 期に配属された連 携協力校で継続的 に実習を行う。特定 学級に副担任相当 で入る。学卒院生の 希望人数に従って 実習の班編成を行 う。	・週3日程度×2週以 上、10日間。 1日(8時間)×10日 =80時間 ・課題解決実習に連 動した形をとるので、 課題解決実習より先 に始まり、途中で期間 が重なる場合は週当 たりの実習日を増や すことも可能。	2
課 題 解 決 実 習	2年次通年 実習時期は個 別に決定する。 ※4月～11月末	現職院生(休職で の入学者を含む) は勤務校。 学卒院生及び県外 からの現職院生 は、連携協力校等。	1校に1名の学生の 配置を原則とする が、学卒院生の場 合、校種によっては 連携協力校に複数 で配置されること もある。	1日(8時間)×20日 =160時間 (合計160時間)	4
実 習 合 計 ※(学卒院生がインターン実習を選択した場合)				400時間 (480時間)	10 (12)

5 実習の進行計画

	連携協力校等	教職大学院	連絡・通知等
1 年 次	4月 ・連携協力校等担当教員決定・報告 ・課題発見学習Ⅰ 実習計画作成及び送付	4月 ・実習ガイダンス	4月 ・連携会議調整
	5月	5月	5月
	第1回教職大学院連携推進会議〔5月10日(木)〕仮		
	6月 実習連携部会の実施	6月 実習連携部会の実施	6月
	7月 ・実習連携部会の報告	7月 ・「課題発見学習Ⅰ」事後指導 ・「課題発見学習Ⅰ」実習評価 ・実習連携部会の報告	7～8月 ・連携協力校へ事前協議及び「実習計画」作成依頼
	7～8月 ・「課題発見実習Ⅱ」事前指導 ・院生による実習校訪問 ・実習計画提示	7～8月 ・「課題発見実習Ⅱ」事前指導	
	9月～10月 ・実習連携部会の実施 ・「課題発見学習Ⅱ」実習評価の報告	9月～10月 10月 ・「課題発見学習Ⅱ」事後指導	9月～10月 ・連携会議調整
	第2回連携協力校等推進会議〔10月25日(木)〕仮		
	11月 ・実習連携部会の報告	11月 ・実習連携部会の報告	11月 12月 ・連携会議調整 ・連携協力校へ事前協議及び「実習計画」作成依頼
	1月	1月～3月 ・「課題発見実習Ⅱ」事前指導	
第2回教職大学院連携推進会議〔2月21日(木)〕仮			
2月 課題発見実習Ⅱ後期 ・実習連携部会の実施 ・実習連携部会の報告	課題解決実習打合せ(課題解決実習の配置校訪問)	・「課題発見学習Ⅱ」事後指導 ・「課題発見学習Ⅱ」実習評価の提出 ・実習連携部会の報告 ・専門職学位課程専攻会議(「課題発見学習Ⅱ」の評価) ・次年度の院生実習配置計画 ・専門職学位課程専攻会議(「課題解決学習」の評価等)	1月～3月 ・次年度の実習配置依頼
3月			
2 年 次	<p>・ 課題解決実習4月～11月（実習期間を通して8時間×20日の実習日を指定し、連携協力校及び現職院生勤務校で実施する。）</p> <p>※大学指導教員は、実習日に合計10回40時間の巡回指導を行う。</p>		

第Ⅱ章 実習の内容

1 1年前期：課題発見実習Ⅰ〔2単位：8時間×10日間〕

(1) 実習校：琉球大学教育学部附属小学校・中学校・特別支援学校（1年次前期4～7月）
〔附属小学校3日・附属中学校4日・特別支援学校3日〕

(2) 目的

- ① 自分自身や勤務校、沖縄県の教育実践上の課題を見出す。
- ② 校種を超えた学校教育全体のつながりと流れを把握し、学校教育の全体構造の理解を深める。

(3) 学生の配置

- ① 2～3名からなる実習班を編成し（7班編成）、実習班ごとに各小・中学校で実習する。

(4) 特徴「問題の発見」

- ① 授業や児童生徒の観察を通して、自分自身や勤務校、沖縄県の課題を見出す。
- ② 学校生活全般の観察や授業研究等に参加して、教育実践の振り返り方の参考にする。
- ③ 異なる校種の授業や児童生徒の観察を通して、教育内容の連続性や児童生徒の発達的变化、特別支援教育の意義を理解するために、小・中学校及び特別支援学校で実習する。
- ④ 原則として週1回（1日8時間）の実習を10日間実施する。

(5) 事前・事後の準備 ※附属小・中学校、特別支援学校の「学校運営委員会」との調整。

	期間	内容	大学院教員	形態	備考
課題発見実習Ⅰ 10日間	事前	実習前に実習校についてオリエンテーションを行う。2時間	大学教員2名が院生を指導する。	観察実習中心	森・比嘉・城間・白尾
	実習期間	附属学校、特別支援学校を訪問して、院生の課題意識に基づいた教育課題の把握状況を確認する。 また、隣接校種の授業や児童生徒の観察を通して、教育内容の連続性や児童生徒の発達的变化、特別支援教育の意義の理解を促し、より視野の広い課題把握に努めることができるように指導する。	2～3名からなる大学教員が日時をずらして、訪問する。		4月下旬～7月上旬
	事後	実習後に課題発見についての事後指導を行う。2時間	課題研究Ⅰで大学教員が院生を指導する。		森・比嘉・城間・白尾

(6) 実習の具体的内容

- ① 子どもたちの様子や教師の指導法について、学年によりどのような違いがあるかという観点から、各学年の授業等を参観し、年齢にともなう発達の様相と指導方法の相違などを把握する。また特別支援教育の多様性を理解する。実習校担当教員から、カリキュラムの特性と構成などの教務事項等の説明を受け、質疑応答を行い、学校全体の概要を把握する。 ※「実習校担当教員」は大学院側との調整を兼務する。
- ② 特定の学級に入り、学級経営の実践、児童・生徒指導の実践、及び授業実践を参観する。その後、実習校で事後検討会を行い、実習で修得した事柄をまとめ、実習記録簿に記載する。

(7) 実習の実施方法

- ① 2～3名からなる実習班を編成し（7班編成予定）、実習班ごとに各学校で実施する。
- ② 大学院教員は実習校に出向き、観察オリエンテーションと事後検討会に同席し、指導にあたる。
- ③ 実習生は実習日ごとに実習記録簿を作成し、実習校担当者と大学院担当者に提出する。

(8) 評価項目・基準

- ① 学校教育構造の理解
校種を超えた学校教育全体のつながりと流れを理解し、児童・生徒の発達における各校種の役割を自分なりに位置づけることができたかどうか。
- ② 授業観察力
発達理解に基づき、児童・生徒の生活指導や生徒指導及び授業実践をどの程度捉えることができたかどうか。
- ③ 課題発見力
学校現場での観察実習と希有の課題を省察することを通して、自らの研究課題をつかむことができたかどうか。

(9) 評価方法 ※実習校は評価の情報は提供するが、評価の実務はない。

- ① 評価項目・基準を実習校と共有し、実習記録簿の記述内容、及び、実習時や事後検討会での発言内容から、上記評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院教員で協議する。
- ② 最終的な成績評価は、原案を教育実習委員会で作成し、専攻会議で評価する。

(10) 事前・事後指導及び実習の日程

- ① 事前指導 [4月10日(火) 3限 12時50分～ 14時20分] ※課題研究 I

1) 場所：(305) 教室 ※文系総合研究棟3階教職大学院フロアー

2) 内容(指導者)

- ア 実習の進め方について(白尾・城間・道田)
- イ 小学校教育について(森)
- ウ 中学校教育について(比嘉)
- エ 特別支援学校について(城間)
- オ 附属小・中学校下見

- ② 事後指導 [7月3日(火) 3限 12時50分～ 14時20分] ※課題研究 I

1) 場所：(305) 教室 ※文系総合研究棟3階教職大学院フロアー

2) 内容(指導者)

- ・課題発見実習 I のまとめ(白尾・道田・森・比嘉・城間)

③ 実習の日程

附属小学校	附属中学校	備考
6月8日(金)	5月18日(金)	①4月19日(木)16時30分～ 附属中：課題発見実習 I オリエンテーション ②6月4日(月)16時45分～ 附属小：課題発見実習 I オリエンテーション ②各院生は実習日事前に実習日の行動計画を提出する。詳細は実習前に説明する。
6月15日(金)	5月25日(金)	
6月20日(金)	6月6日(水)	
	6月20日(水)	
特別支援学校実習(3日間)は実習日が決まり次第、連絡する。		

2 1年後期：課題発見実習Ⅱ〔4単位：2週間連続（8時間×10日間）×2回〕

(1) 実習校：連携協力校 ※規模の異なる同一校種

- ①中城村立中城南小学校 ②宜野湾市立普天間第二小学校
 ③宜野湾市立普天間中学校 ④沖縄市立美東中学校
 ⑤沖縄県立普天間高校 ⑥沖縄県立中部商業高校 ⑦沖縄県立西原高校

(2) 目的

- ① 現職院生は、勤務校以外の学校での観察・参加を通して発見した自らの教育課題に対して、大学で学んだことを基にして解決策を試行し、省察して課題の明確化を図る。
 ② 学卒院生は、課題発見実習Ⅰでの観察・参加を通して、明らかにした自らの教育課題に対して、大学で学んだことを基にして解決策を試行し、省察して課題の明確化を図る。

(3) 学生の配置

2～3名からなる実習班を編成し（7班編成予定）、実習班ごとに各2校（原則として同一校種）で実習する。学生は、各自特定の1学級に所属する。

(4) 特徴「解の探索」

- ① 後期前半に1回目、後期後半に2回目の実習を配置することで、1回目の実習を振り返り、大学での学びを活かしながら2回目の実習でさらに深められるように2回の実習をする。
 ② 2回目の実習は、規模や地域の異なる学校(同一校種)で行うことで、多様な環境でより汎用性の高い解決策を模索する。
 ③ 「課題分析・試行期」として児童生徒の実態を詳細に観察・調査・分析したうえで、複数の公立学校を中心とした教壇実習で試行する。
 ④ 本時に至る児童生徒の様子や学びを把握するために期間限定集中型とする。
 ⑤ 2週間連続で9月頃と2月頃の2回に分けて実習をする。

(5) 事前・事後の準備

	期間	内容	大学院教員	形態	備考
課題発見実習Ⅱ 10日間×2回	事前	各学校の実習担当の大学教員ペアが実習校を訪問して、実習について確認を行う。	各学校の実習担当の大学教員ペアが訪問する。	観察＋教壇実習中心	8月後半 連携協力校担当者
	前期	課題発見実習Ⅰで発見した課題に対して、大学で学んだことをどのように活かしながら、解決策を試行しているかを把握する。	各学校の実習担当の大学教員ペアが実習校を2回訪問する。		9月中旬 連携協力校担当者主・副担当者
	後期	1回目の成果と課題に基づいた方策を新たにもって、規模や地域の異なる学校（同一校種）で行うことで、多様な環境でより汎用性の高い解決策を模索できるように指導する。	各学校の実習担当の大学教員ペアが実習校を2回訪問する。		2月中旬 連携協力校担当者主・副担当者

(6) 実習の具体的内容

- ① 実習当初に実習校担当教員より、学校の全体的概要やカリキュラムの特性と構成などの教務事項について説明を受けることにより、実習校の全体像を把握する。
- ② 次に、授業、部活動等の課外活動、児童・生徒指導など学校教育活動の全体を観察する。また、その際、配属となったクラスの生徒一人一人を把握するために個人毎の観察記録をとる。また、配属クラスの特徴を把握するという観点から授業の様子や学級活動場面での児童・生徒及び教師の動きを観察し、記録する。
- ③ 中盤以降は、自らの教育課題に迫るための授業等を行い、授業等以外は、授業等補助として実践に参加する。

(7) 実習の実施方法

- ① 実習校は原則として規模や地域の異なる学校(同一校種)とする。学生の課題テーマの共通性の程度により、2~3名からなる実習班を編成し(7班編成予定)、実習班ごとに各小・中学校で実施する。
- ② 大学院教員は事前指導として、実習校に出向き、観察オリエンテーションと実習計画作成のアドバイスをする。また、事後検討会に同席し、指導にあたる。さらに、各学生の実習の成果及び課題の明確化等を確認する。
- ③ 実習生は、実習日ごとに実習記録簿を作成する。

(8) 評価項目・基準

① 現職院生について

〔自己省察〕

- 1) 実習校での観察・参加を通して、自らの実践上の課題解決への試行等から、どの程度具体的かつ明確に成果と課題を把握できたかどうか。

〔課題の明確化〕

- 2) 自己省察に基づき、自己の課題研究を深め、この時点での成果と課題を明確にできたかどうか。

〔課題解決力〕

- 3) 研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を模索し、見通しをもった解決策を提起し、実践することができたかどうか。

② 学卒院生について

〔自己省察〕

- 1) 実習校での観察・参加を通して、自己の知識や技能の改善点を、どの程度、具体的かつ明確に知ることができたかどうか。

〔課題の明確化〕

- 2) 自己省察に基づき、自己の課題研究を深め、この時点での成果と課題を明確にできたかどうか。

〔課題解決力〕

- 3) 研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を模索し、見通しをもった解決策を提起し、実践することができたかどうか。

(9) 評価方法 ※実習校は評価の情報は提供するが、評価の実務はない。

- ① 評価項目・基準を実習校と共有し、実習記録簿の記述内容、及び、実習時や事後検討会での発言内容から、上記評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院教員の協議の上、成績評価原案を教育実習部会で作成し、専攻会議で評価する。

(10) 事前・事後指導及び実習の日程

【 1回目 】

① 事前指導 [7月24日(火) 3限 12時50分～ 14時10分] ※課題研究Ⅰ

1) 場所:(305) 教室 ※文系総合研究棟3階教職大学院フロアー

2) 内容(指導者)

ア 実習の進め方について(白尾)

イ 小学校教育について(村末)

ウ 中学校教育について(比嘉)

② 事後指導 [10月9日(火) 3限 12時50分～ 14時20分] ※課題研究Ⅱ

1) 場所:(305) 教室 ※文系総合研究棟3階教職大学院フロアー

2) 内容(指導者) ※①に同じ。

ア 課題発見実習Ⅱのまとめ(村末・比嘉・白尾)

3) 実習の日程

中城南小学校 9月10日(月)～ 10月25日(金)	普天間第二学校 9月3日(月)～ 9月14日(金)	普天間高校 8月30日(木) ～9月12日(水)	中部商業高校 9月10日(月) ～9月25日(火)
普天間中学校 9月10日(月)～ 10月25日(金)	美東中学校 9月10日(月) ～10月25日(金)	西原高校 9月3日(月)～ 9月14日(金)	

【 2回目 】

① 事前指導 [1月15日(火) 3限 12時50分～ 14時20分] ※課題研究Ⅱ

1) 場所:(305) 教室 ※文系総合研究棟内3階教職大学院フロアー

2) 内容(指導者)

ア 実習の進め方について(下地)

イ 小学校教育について(丹野)

ウ 中学校教育について(城間)

エ 高等学校教育について(下地)

② 事後指導 [2月19日(火) 3限 12時50分～ 14時20分] ※課題研究Ⅱ

1) 場所:(305) 教室 ※文系総合研究棟内3階教職大学院フロアー

2) 内容(指導者)

ア 課題発見実習Ⅱのまとめ(白尾・下地・丹野・城間)

③ 実習の日程

中城南小学校 2月4日(月)～ 2月18日(月)	普天間第二学校 2月4日(月)～ 2月18日(月)	中部商業高校 1月28日(月) ～2月8日(金)	普天間高校 /
普天間中学校 2月4日(月)～ 2月18日(月)	美東中学校 1月28日(月) ～2月8日(金)	西原高校 1月28日(月) ～2月8日(金)	/

3 2年前・後期：課題解決実習〔8時間×20日間（実習校と調整して随時設定する）〕

(1) 実習校：現職院生（勤務校） 学卒院生・県外現職院生（連携協力校）

(2) 目的

① 1年次に発見し試行した課題解決について、特定校（勤務校、あるいは連携協力校）で複数回試すことで、より確かな解決を目指す。

A 学生各自が課題解決のための対応策の企画・立案を実習開始前に行い、その実践に向けて計画的に実習することにより、課題研究の内容を検証し、課題解決に向けた実践力を確かなものとする。

B 全ての教員にとって必要な、教科等の指導、学級経営、及び、児童・生徒指導の実践力を高める。

(3) 学生の配置

原則として1実習校に1名の院生を配置して実習する。現職院生は原則として勤務校で研修日に実施する。学卒院生は連携協力校で行い、具体的な実習校は、学生の課題研究テーマにより決定する。なお、課題研究のテーマにより、現職院生の勤務校で実習することもあり得る。

(4) 特徴「解の評価・解決」

ア. 現職院生は勤務校で、学卒院生は1年次後期に配属された連携協力校で継続的に実習を行うことで、より確かな課題の解決を行う。

イ. 課題研究のための試行や問題解決もここで行い、検証授業等の形で提案する。

(5) 事前・事後の準備

	期間	内容	大学院教員	形態	備考
課題解決実習 8時間×20日間	事前	1年次に発見し試行した課題解決について、特定校（勤務校、あるいは連携協力校）で複数回試すことで、より確かな解決を目指すことができるように実習の見通しを院生と大学教員で確認しておく。	専攻長、副専攻長、主・副担当教員、実習委員長、及び院生の主・副担当教員が各院生の勤務校、連携協力校を訪問する。	教壇実習中心	2～3月 吉田・田中 白尾・交流 人事大学院 教員、主・ 副担当教員
	前期	より確かな課題の解決を行えるように課題研究のための試行や問題解決も進め、検証授業等の形で提案できるように指導する。	各学校の実習担当の大学教員が実習校を6回訪問して課題解決状況を把握し、課題解決に向けて指導助言を行う。		4月下旬～ 11月末 主・副担当 教員
	後期		各学校の実習担当の大学教員が実習校を4回訪問して課題解決のまとめ方の方策を視野に入れながら指導助言を行う。		

(6) 実習の具体的内容 ※目的に沿って二部構成からなる。

【 目的 A に関連して：課題研究に関する実習内容 】

- ① 学生各自が設定した課題解決（学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など）のための対応策を立案し、それを実践する。
- ② 実践内容としては、教科の授業や特別活動等の授業および学校内での研修会の実施や地域連絡会の設定が想定される。
- ③ 実践後は、実践検討会を開催し、自己の実践を評価、再考察し、次の実践案を考案する。学生の実践及び実践後の検討会は、実習校及び近隣の小・中学校教員に対して全て公開とする。実践検討会には、実践者（学生）、実習施設の実習指導教員、大学院教員が参加するが、その他、実習校及び近隣の小・中学校教員の参加も募る。
- ④ さらに、その実践案を実施し、再度、実践検討会を開催し、自己の実践を評価、再考察し、次の実践へとつなげる。
- ⑤ このようなサイクルを繰り返すが、サイクルの回数や時期などは、学生の課題研究のテーマにより個別に計画していく。

【 目的 B に関連して：日常の実践力の向上に関する実習内容 】

- ① 次の 3 点の実践及び実践検討会を必ず 3 回以上含める。
 - a. 教科等の指導
 - b. 学級経営
 - c. 児童生徒指導の実践※ 実践の時期及び回数は、課題研究に関する実習との関連や学生の既存の実践力などを鑑み、学生ごとに実習校指導教員と大学院指導教員が相談の上、決定する。

(7) 実習の実施方法

- ① 実践計画を実習開始前に実習校における年間教育計画に組み込み、学校での教育活動における位置づけを明確にする。その際、大学院教員も同席し、学生の課題に沿った実習ができるように実習校指導教員と相談しながらアドバイスをする。
- ② 大学院教員は、a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導の実践時に最低各 1 回、学生の実践を参観し、実践検討会を開催して指導を行う。また、それ以外にも必要に応じて実習校に出向き、合計 10 回 40 時間は実習校において指導にあたる。
- ③ 実習期間中も課題研究の授業は併行して行うが、実習とは別の時間帯に、主に大学において指導する。また課題研究の授業では、実習での実践を様々な角度から捉えなおし、再考察し、まとめ、次の実践へと繋ぐべくより深い考察を行う。それゆえ、課題研究の評価は、実習における評価とは別に、大学院教員が行う。
- ④ 実習生は、実習日ごとに実習記録簿を作成する。

(8) 評価項目・基準

- ① 現職院生について

〔自己省察〕

実習校での協働からなる実習を通して、研究課題の解決策を示し、授業実践に積極的に取り組み、省察し、どの程度、具体的かつ明確にできたかどうか。

〔課題解決力〕

研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を提起し、実践することを通

して研究課題に対する答えを示すことができたかどうか。

〔教育実践力〕

- 1) これまでの経験と大学院での実習を含めた学修を通して、研究課題の解決に向かう授業実践を広い視野から創造して実践することができたかどうか。
- 2) 自らの教育実践力を自己評価して向上のために必要な手立てを考え、実行することができたかどうか。
- 3) 児童生徒に育てる力を見取るために必要な授業実践をする力（教材研究・実践・評価・反省等を自ら行う力）を授業に反映できたかどうか。
- 4) a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導などの実践的スキルは、他の教員の模範となるレベルにあるか。

② 学卒院生について

〔自己省察〕

実習校での協働からなる実習を通して、研究課題の解決策を示し、授業実践に積極的に取り組み、省察し、どの程度、具体的かつ明確にできたかどうか。

〔課題解決力〕

研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を提起し、実践することを通して研究課題に対する答えを示すことができたかどうか。

〔教育実践力〕

- 1) これまでの大学院での実習を含めた学修を通して、研究課題の解決に向かう授業実践を広い視野から創造して実践することができたかどうか。
- 2) 自らの教育実践力を自己評価して向上のために必要な手立てを考え、実行することができたかどうか。
- 3) 児童生徒に育てる力を見取るために必要な授業実践をする力（教材研究・実践・評価・反省等を自ら行う力）を授業に反映できたかどうか。
- 4) a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導などの実践的スキルが、即戦力として通用するレベルにあるか。

(9) 評価方法 ※実習校は評価の情報は提供するが、評価の実務はない。

- ① 評価項目・基準を実習校と共有し、実習記録簿の記述内容、及び、実習時や事後検討会での発言内容から、上記評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院教員の協議の上、専攻会議で評価する。
- ② 最終的な成績評価は、原案を教育実習委員会で作成し、専攻会議で評価する。

4 2年前期：インターン実習（選択2単位：週1回8時間×10日間）

(1) 実習校：連携協力校 ※学卒院生が「課題発見実習Ⅱ後期」で実習した連携協力校。

(2) 目的

学卒院生が1年次に発見し試行した課題解決について、連携協力校で複数回試すことで、より確かな解決を目指す。また学校における年間サイクルを経験し、教員就職後に即戦力として活躍できるための準備をする。

(3) 学生の配置

原則として1年次後期に配属された連携協力校で継続的に実習を行う。特定学級に副担任相当で入る。

(4) 特徴「解の評価・解決」

- ① 学卒院生が1年次後期に配属された連携協力校で継続的に実習を行うことで、より確かな課題の解決を行う。
- ② 課題研究のための試行や問題解決もここでを行い、検証授業等の形で提案する。
- ③ 新年度開始時期を中心に10日間程度（週に3日程度、約3週間）の実習を行う。
- ④ 課題解決実習に連動した形をとるので、課題解決実習より先に始まり、途中で期間が重なる場合は週当たりの実習日を増やすことも可能。

(5) 事前・事後の準備

	期間	内容	大学院教員	形態	備考
インターン実習 8時間×10日間	事前	1年次に発見し試行した課題解決について、連携協力校で複数回試すことで、より確かな解決を目指すことができるように実習の見通しを院生と大学教員で確認しておく。	各学校の実習担当の大学教員ペアが訪問する。	教壇実習中心	2～3月 ※課題解決実習と同一校とする。
	前期	より確かな課題の解決を行えるように課題研究のための準備や試行及び問題解決も視野に入れながら協働を通じた実習を進める。課題解決実習との連続を意識して実習内容を充実させる。	各学校の実習担当の大学教員ペアが実習校を4回訪問して課題解決状況を把握し、課題解決に向けて指導助言を行う。		新年度開始時期を中心に行う。

(6) 実習の具体的内容

- ① 実習当初に実習校指導教員より、学校の全体的概要やカリキュラムの特性と構成などの教務事項について説明を受けることにより、実習校の全体像を把握する。
- ② 1年次に発見し試行した課題解決について、連携協力校で複数回試すことで、より確かな解決を目指す。
- ③ 年度開始時期の学校の総体を体験的に学修した上で、学生各自が設定した課題解決（学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など）のための対応策を立案し、それを実践する。
- ④ 課題解決実習に連続して取り組む。

(7) 実習の実施方法

- ① 実践計画を実習開始前に実習校における年間教育計画に組み込み、学校での教育活動における位置づけを明確にする。その際、大学院教員も同席し、学生の課題に沿った実習ができるように実習校指導教員と相談しながらアドバイスをする。
- ② 学生の課題テーマの共通性の程度により、2～3名からなる実習班を編成し、実習班ごとに各学校で実施する。
- ③ 大学院教員は事前指導として、実習校に出向き、観察オリエンテーションと実習計画作成のアドバイスをする。また、事後検討会に同席し、指導にあたる。さらに、各学生の実習の成果及び課題の明確化等を確認する。
- ④ 実習生は、実習日ごとに実習記録簿を作成する。

(8) 評価項目・基準

〔自己省察〕

- ① 年度開始時期の学校での協働からなる実習を通して、学生各自が設定した課題と照らして解決のための見通しをもつことができたかどうか。

〔協働力〕

- ② 年度開始時期から学級の安定化に向けた重要な時期に学級担任と協力してより良い教育活動を実践することができたかどうか。

〔教育実践力〕

- ③ 年度開始時期の学校の総体を体験的に学修した上で、学生各自が設定した課題解決(学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など)のための対応策を立案し、それを実践することができたかどうか。

(9) 評価方法 ※実習校は評価の情報は提供するが、評価の実務はない。

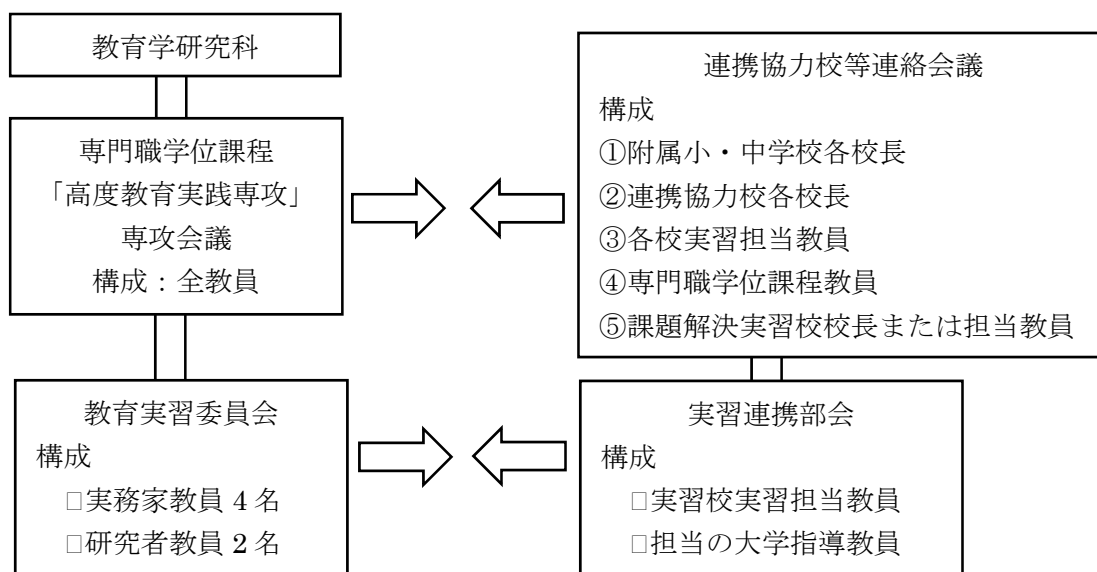
- ① 評価項目・基準を実習校と共有し、実習記録簿の記述内容、及び、実習時や事後検討会での発言内容から、上記評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院教員の協議の上、専攻会議で評価する。

5 実習イメージ (2年間)

	1年	2年	備考	
4月		インターン実習(2単位) 週3日程度×2週以上	インターン実習は学卒院生の選択科目。課題解決実習と重ねることで週当たりの実習日を増やすことも可能 連携協力校の都合により期間が前後する 事前協議によって期間を調整する 課題発見実習IIは主免許校種類で規模の異なる学校で行う	
5月	課題発見実習 I 週1日×10週 2単位 附属小・中学校・特別支援学校	※新年度開始時期 連携協力校		課題解決実習 週1日程度×20回 4単位
6月	4月下旬～7月上旬 小学校と中学校での観察実習中心	大学院：インターン実習の評価		学卒院生：連携協力校 現職院生：勤務校 ※11月末までに終了
7月				
8月	大学院：課題発見 I の評価			
9月	課題発見実習 II (前期) 2週間連続 2単位			
10月	連携協力校 9月中旬			
11月				
12月		※院生「実習のまとめ」提出		
1月		大学院：課題解決実習の評価		
2月	課題発見実習 II (後期) 2週間連続 2単位 連携協力校 2月初旬前後	課題研究IV 発表会		
3月	大学院：課題発見 II の評価	大学院：課題研究IVの評価		

6 連携体制の全体組織

(1) 全体組織



(2) 受入校ごとの連携方法

- ① 連携協力校（附属小・中学校・特別支援学校・各公立学校）による「実習連携部会」設置
 - 1) 構成員：実習施設の実習担当教員及び各実習施設担当の大学院教員
 - 2) 協議内容：実習時間、実習の具体的内容、実施方法、評価項目・基準評価方法等、実習全般の具体的事項の協議、確認する。協議内容は、大学院教員がまとめ、教育実習部会及び連携協力校等連絡協議会に報告する。連携協力校等連絡協議会は、各実習施設での実習が適切に行われているかを確認、統括する。
 - 3) 部会の運営：各実習前での事前打ち合わせの実施／実習中／実習後に行う。
 - 4) 実習の評価項目と基準は実習校と共有して、実習校からの意見を基に大学院教員が評価する。

(3) 実習校（附属学校・連携協力校）の動き

- ① 実習校は実習担当教員を決める。
- ② 実習担当教員は各実習の目標及び評価項目と基準を理解する（評価の実務はない）。
- ③ 実習連携部会を設ける。
- ④ 事前訪問で大学院教員と実習についての確認を行う。
- ⑤ 実習を展開する。
- ⑥ 実習担当教員は各実習の目標及び評価項目と基準に基づいて実習生を観察、指導する。
- ⑦ 実習記録簿に押印する。※朱書き指導等の必要はない。指導は基本的に口頭で行う。
- ⑧ 「課題発見Ⅱ」、及び「課題解決実習」では、実習生の研究課題に基づいた提案授業等の時間を確保する。ただし通常の学校・学級運営業務に支障をきたさないことを条件とする。
- ⑨ 実習生の研究課題に基づいた提案授業等の時間以外は、通常の学級運営業務を行い、実習生はそれをサポートする。
- ⑩ 実習連携部会で実習生の評価について意見交換を行う。
- ⑪ 連携協力校等連絡協議会（年3回実施）に参加して、連携協力校等における実習等に関する調整、検討等を行い、各実習施設での実習が適切に行われているかを確認、統括する。

第三章 実習上の留意点

- 1 実習期間中は、実習校の教員の服務に準じて勤務する。実習中の具体的な勤務時間等については、実習校の指示に従う。
 - 2 病気や止むを得ない理由により、欠席、遅刻、早退する場合には、実習校及び教育学部学務担当（098-895-8317）に事前に届け出る。急な場合には、速やかに電話で連絡する。
 - 3 実習校までの通勤については、事前に確認をしておく。駐車場の使用については、実習校の指示に従い、安全に留意する。
 - 4 実習中に得た個人的な情報等は守秘義務を守り、外部に漏らすことのないようにする。また、個人情報の入ったパソコン等の扱いには十分留意し、盗難やデータ流失等が起こらないようにする。
 - 5 実習に際しては、教職大学院の実習のねらいや目標を十分に理解し、自己の研鑽に努めるとともに、実習校の教育に寄与できるよう積極的に取り組む。
- ※ その他、実習に関する留意事項等については、「教職大学院学校における実習の手引と記録」の記載事項を遵守すること。

【平成30年度 教職大学院実習連携協力校一覧】 2018年4月1日現在

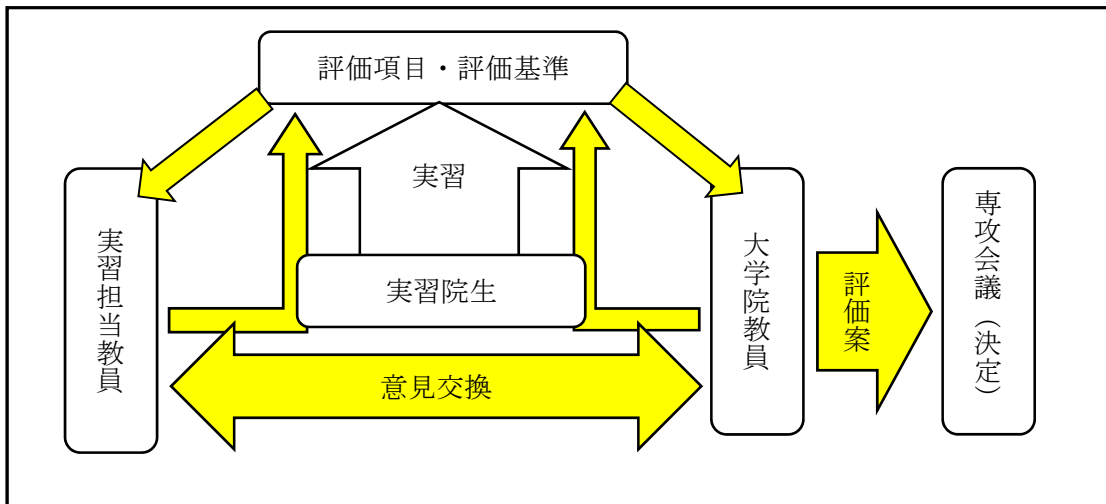
	学校名	郵便番号	所在地	電話	担当者
1	琉球大学教育学部附属小学校	903-0213	西原町字千原1番地	098-895-8454	教頭先生
2	琉球大学教育学部附属中学校	903-0213	西原町字千原1番地	098-895-8319	教頭先生
3	沖縄盲学校	901-1111	南風原町字兼城473	098-889-5375	教頭先生
4	沖縄ろう学校	901-2304	北中城村字屋宜原415	098-932-5475	教頭先生
5	大平特別支援学校	901-2113	浦添市大平1-27-1	098-877-4941	教頭先生
6	鏡が丘特別支援学校	901-2104	浦添市当山3丁目2-7	098-877-4940	教頭先生
7	島尻特別支援学校	901-0411	八重瀬町字友寄160	098-998-8240	教頭先生
8	泡瀬特別支援学校	904-2173	沖縄市比屋根5-2-20	098-932-7584	教頭先生
9	森川特別支援学校	903-0128	西原町字盛河151	098-945-3008	教頭先生
10	美咲特別支援学校	904-2153	沖縄市美里4-18-1	098-938-1037	教頭先生
11	はなさき分校	901-2304	北中城村字屋宜原415	098-989-0192	副校長先生
12	中城村立中城南小学校	901-2424	中城村字南上原800番地	098-895-5505	教頭先生
13	宜野湾市立普天間第二小学校	901-2201	宜野湾市新城2-8-19	098-892-2424	教頭先生
14	宜野湾市立普天間中学校	901-2201	宜野湾市新城2-41-1	098-892-3328	教頭先生
15	沖縄市立美東中学校	904-2171	沖縄市高原5-12-1	098-937-3613	教頭先生
16	沖縄県立普天間高校	901-2202	宜野湾市普天間1-24-1	098-892-3354	教頭先生
17	沖縄県立中部商業高校	901-2214	宜野湾市我如古2-2-1	098-898-4888	教頭先生
18	沖縄県立西原高校	903-0117	中頭郡西原町字翁長610番地	098-945-5418	教頭先生

評価表の活用と必要事項の記入について

(1) 実習の評価についての原則

実習における評価は次の四つの段階を基本として行う。

- ① 各実習に設定されている評価基準に従って、実習校担当教員の意見を伺う。
 - ② 「①」と実習記録等及び提出物・提案授業等を評価基準に沿って大学教員が評価する。
 - ③ 教職大学院「高度教職実践専攻」会議において協議の上、評価を決定する。
- ※ 実習校の実習担当教員には、評価の負担をさせないために、実習の評価基準を大学教員と共有し、それに基づく意見を伺うが、評価は行わない。
- ④ 校長の記名押印、実習校担当教員の記名押印、配属学年・組及び事前指導日(事前打ち合わせ日)、実習期間、出欠の記録等については、各連携協力校等で記入する。



(2) 評価方法

- ① 評価表は、現職教員用と学部卒院生等の2種類があり、評価の項目と内容が異なっている。キャリア形成につながる評価をする。
- ② 評価に当たっては、各評価項目を参考にして、評価の欄の「A」を最高とするA・B・C・Dの4段階で行う。評定にあたっては実習校の担当教員の意見を参考にする。
- ③ 評価の目安
A:90点以上 B:80点以上 C:70点以上 D:60点以上 F:(単位は認定されない)
- ④ 評価にあたっては、実習録等の記録などの提出物も評価資料とする。
- ⑤ 大学院の指導教員については、大学院で評価表を受領後、記入・押印する。
- ⑥ 上記を踏まえて実習連携部会で協議する。
- ⑦ 専門職学位課程の専攻会議で決定する。

(3) 実習記録等の返却について

提出された実習記録等は評価資料として活用して、実習記録は、評価終了後に大学院指導教員から実習生へ返却する。

(4) 評価の最終確認について

大学院では、院生に返却された実習録等の資料を点検評価し、実習校ごとの評価について、連携協力校と相談をして最終的に決定する。評価の最終確認は大学院指導教員から各連携協力校へ連絡する。

附 録

【 課題発見実習 I・II 】に共通する資料

教育実習原簿	21
教育実習出勤簿	22
教育実習校の概要(様式)	24

平成30～31年度 教育実習出勤簿

氏名〔 〕

	実習校	事前・後 指導日	実習実施日(月/日 出勤印)					実習校 担当者印
課題 発見 実習 I	附属小 学校	/	/	/	/			/
	附属中 学校		/	/	/			/
	特別支 援学校	/	/	/	/	沖縄盲学校 沖縄ろう学校 特別支援学校		大学院担当者印 /
課題 発見 実習 II	前期	/	/	/	/	/	/	/
		/	/	/	/	/	/	
	後期	/	/	/	/	/	/	/
		/	/	/	/	/	/	
IT 実習 ※	/	/	/	/	/	/	/	
	/	/	/	/	/	/		
課題 解決 実習	/	/	/	/	/	/	/	
			/	/	/	/		
			/	/	/	/		
			/	/	/	/		

※ IT 実習＝インターン実習

※ 出勤簿は各自が責任をもって管理し、出勤時に捺印をする。出勤簿の扱いは、実習校に従う。

平成30～31年度 教育実習出勤簿

教職大学院教育実習用

氏名 [_____]

	実習校	事前指導日	実習実施日(月/日 出勤印)				
課題 解決 実習		X	/	/	/	/	/
			/	/	/	/	/
			/	/	/	/	/
			/	/	/	/	/

※ この出勤簿は、各自が責任をもって管理し、出勤時に捺印をする。

(出勤簿の扱いについては、実習校の扱い方に従う。)

※ 各自が保管し、各実習の終了ごとに教育実習委員長へ提出する。

※ 半日(4時間分)の課題解決実習は押印欄に「0.5日」と記入すること。

※ 各自が2年間保管し、各実習の終了日に実習校担当者印をもらって教育実習委員長へ提出する。

教育実習校の概要

学校名			
所在地	〒	Tel	
校長名	先生	担当教諭名(学級)	先生
教頭(副校長名)	先生	担当教諭名(学級)	先生
教職員	合計 名 (男子 名) (女子 名)		
学級数	()学級	児童・生徒数	(男子 名)(女子 名) 計 名
学校の特色 ・学校の沿革 ・地域の特色 ・その他		
		
		
		
		
教育方針 ・教育目標 ・経営方針等 ・その他		
		
		
		
		
備考 ・課題研究テーマとの関わり ・実習校に関する所感など		
		
		
		
		
		大学院指導教員検印	

※ 実習記録に添えて大学院指導教員へ提出する。

【 課題発見実習 I 】に関する資料

教育実習校の概要(様式).....	25
「課題発見実習 I」省察記録(様式).....	26
「課題発見実習 I のまとめ」.....	27
「課題発見実習 I」評価表(学卒・現職共通).....	28

【 課題発見実習Ⅰ】 教育実習校の概要

学校名			
所在地	〒	Tel	
校長名	先生	担当教諭名(学級)	先生
教頭(副校長名)	先生	担当教諭名(学級)	先生
教職員	合計 名 (男子 名) (女子 名)		
学級数	()学級	児童・生徒数	(男子 名)(女子 名) 計 名
学校の特徴 ・学校の沿革 ・地域の特徴 ・その他		
		
		
		
		
教育方針 ・教育目標 ・経営方針等 ・その他		
		
		
		
		
備 考 ・課題研究テーマとの関わり ・実習校に関する所感など		
		
		
		
		
			大学院指導教員検印

※ 実習記録に添えて大学院指導教員へ提出する。

「課題発見実習Ⅰのまとめ」

「課題発見実習Ⅰ」終了後、下記の観点にしたがって、レポートを提出する。レポートの形式はA4サイズ縦型横書き(45字×40行)、4枚以内。提出期限までにメールに添付して速やかに提出する。

※参考文献等を必ず使用し、【注】として記入すること。

提出期限： 月 日() 17時15分 ※以降は提出遅刻になる。

提出先： 教職大学院教員全員

観点1：学校教育構造の理解について、児童・生徒の発達と各校種の役割について。

観点2：観察を通して生活指導・生徒指導及び授業実践をどのようにとらえたか。

観点3：観察実習と希有の課題を省察することを通じた自らの研究課題について。

「課題発見実習Ⅰ」評価表(学卒・現職共通)(琉球大学教職大学院)

平成30年 月 日

学籍番号		氏名	
実習校名	球大学教育学部附属小学校	配属	年 組
	球大学教育学部附属中学校	配属	年 組
	沖縄盲学校・沖縄ろう学校・〔 〕特別支援学校		
出欠等の状況			
出席すべき日数	10日		
出席日数	0日	欠席日数	0日
遅刻日数	0日	早退日数	0日

評価項目・基準		評価
学校教育構造の理解	・ 校種を超えた学校教育全体のつながりと流れを理解し、児童・生徒の発達における各校種の役割を自分なりに位置づけることができたかどうか。	A B C D F
授業観察力	・ 発達理解に基づき、幼児・児童・生徒の生活指導や生徒指導及び授業実践をどの程度捉えることができたかどうか。	A B C D F
課題発見力	・ 学校現場での観察実習と希有の課題を省察することを通して、自らの研究課題をつかむことができたかどうか。	A B C D F

実習期間	平成 30年 5月 9日～ 6月22日 ※10日間	
	附属小学校	6月8日(金)・25日(金)・6月22日(金)
	附属中学校	5月18日(金)・19日(金)・6月6日(水)・20日(水)
	沖縄盲学校	月 日()
	沖縄ろう学校	月 日()
	支援学校	月 日()

総合判定	A B C D F	取得単位数	2単位
------	-----------	-------	-----

高度教職実践専攻長 氏名・印	吉田 安規良	印
-------------------	--------	---

【課題発見実習Ⅱ】に関する資料

平成30年度教職大学院教育実習配置計画	29
課題発見実習Ⅱ実習校への協力依頼事項	30
教育実習校の概要(様式)	32
課題発見実習Ⅱ教育実習日誌	33
課題発見実習Ⅱ省察記録(様式)	34
「課題発見実習Ⅰのまとめ」	35
課題発見実習Ⅱ評価表(学卒院生用・現職教員用)	36

【インターン実習】に関する資料

教育実習校の概要(様式)	38
インターン実習教育実習日誌	39
インターン実習省察記録(様式)	40
「インターン実習のまとめ」	41
インターン実習評価表(学卒院生用のみ)	42

【課題解決実習】に関する資料

教育実習校の概要(様式)	43
課題解決実習教育実習日誌	44
課題解決実習省察記録(様式)	45
課題解決実習評価表(学卒院生用・現職教員用)	46

平成 30 年度 教職大学院教育実習配置計画(課題発見実習Ⅱ)

1 前期 9月～10月 ※実習期間は変更になることもある。

	連携協力校名	実習期間	院生氏名	大学院教員
1	中城村立中城南小学校	9月18日(火)～ 10月2日(火)		丹野清彦
2	宜野湾市立普天間第二小学校	9月3日(月)～ 9月14日(金)		村末勇介
3	宜野湾市立普天間中学校	9月10日(月)～ 9月25日(火)		川上 一 道田泰司
4	沖縄市立美東中学校	9月10日(月)～ 9月25日(火)		藏満逸司 田中 洋
5	沖縄県立普天間高校	8月30日(木)～ 9月12日(水)		下地敏洋 吉田安規良
6	沖縄県立中部商業高校	9月10日(月)～ 9月25日(火)		上間陽子 小林 稔
7	沖縄県立西原高校	9月3日(月)～ 9月14日(火)		杉尾幸司

2 後期 1月～2月 ※実習期間は変更になることもある。

	連携協力校名	実習期間	院生氏名	大学院教員
1	中城村立中城南小学校	2月4日(月)～ 2月18日(火)		丹野清彦
2	宜野湾市立普天間第二小学校	2月4日(月)～ 2月18日(月)		村末勇介
3	宜野湾市立普天間中学校	2月5日(火)～ 2月19日(火)		川上 一 道田泰司
4	沖縄市立美東中学校	1月28日(月)～ 2月8日(金)		藏満逸司 田中 洋
5	沖縄県立普天間高校	/	/	下地敏洋 吉田安規良
6	沖縄県立中部商業高校	1月28日(月)～ 2月8日(金)		上間陽子 小林 稔
7	沖縄県立西原高校	1月28日(月)～ 2月8日(金)		杉尾幸司

※ 各校での80時間の実習(5日間×2週=10日間)とし、この間、事前指導・事後指導に大学院指導教員が参加する。課題解決に向けた研究授業や授業研究会にも積極的に取り組み、課題をより明確化し、解決のヒントつかみながら課題解決実習へつなげる。

課題発見実習Ⅱ実習校への協力依頼事項（教育実習委員会）

1 課題発見実習Ⅱの実習日数及び実習期間について

- (1) 実習日数は、1校あたり2週間連続 10 日間(10 日×8 時間=80 時間)とする。
- (2) 実習期間は、1回目を9月中旬～10 月初旬、2回目を1月下旬から2月中旬を目処に実施する。(別紙に計画された実習日に従って行う。)

※院生の校種及び取得教員免許状によって、高等学校及び特別支援学校での実習も考慮する。

2. 実習校担当教員の役割等について

- (1) 各学校では、実習校担当教員1名を決める。
- (2) 実習校担当教員と大学院指導教員の構成で「実習連携部会」を設ける。
- (3) 実習校担当教員の具体的役割は下記のとおり。
 - ① 実習録を確認し検印を押す。(必要に応じてコメントを口頭で示す。)
 - ② 実習の内容や方法について、実習生に必要な指示をし、相談にのる。
 - ③ 実習生の指導案に基づく授業実践等及び検討会等に参加する。
 - ④ 課題発見実習Ⅱの評価表を基に大学院指導教員と評価について協議する。

3. 事前打ち合わせについて

- (1) 実習に先立って各連携協力校において事前の打ち合わせをする。
- (2) 事前打ち合わせは夏季休業中等に実習生が配属先の連携協力校を訪問して行う。
※ 連携協力校は、学年やクラス・教科の配属、実習中の指導計画、実習にあたっての留意事項(実習校での勤務対応、駐車場指示、給食費等の扱い、服装・持ち物等の準備品など)について、指示と連絡をお願いする。打ち合わせ日時については、実習生が学校へ連絡をして、調整を進める。(8月中旬以降。)

4. 実習の具体的な内容について

- (1) 実習生の配属
各実習生を原則として、特定の1学級(学年)に配属する。
- (2) 講話・説明等
原則として、1日目～2日目にかけて校長、教頭、教務主任、実習校担当教員等から学校経営、カリキュラムの特性と構成などの学校経営や教務事項等に関する講話や説明をお願いする。
※ 実習生が課題研究テーマに関わる連携校の取り組みについて、特定の内容の説明をお願いしたり、関係の委員会や部会に参加を希望したりする場合には、可能な範囲において対応をお願いする。(例、生徒指導、進路指導、安全管理、教科等など。)
- (3) 授業等への参加について(下記のように実習生に伝える。)
「協働を通じた実習」であり、授業等の実施や補助に当たっては、実習校担当教員の指導の下、配当学級や配当学年の授業・学年行事等に積極的に参画する。特に、TTや少人数指導の際には、指導内容を確認の上、授業に積極的に参加する。

(4) 指導案に基づく授業の実施について

- 学部卒院生等は、指導案に基づく授業を原則1時間以上実施する。
- 学部卒院生等は、授業実施に当たり、実習校担当教員の指導の下、同一校に配置された現職教員院生の指導・助言を受けることとする。現職教員院生は、学部卒院生等の授業づくりと授業実践に当たり、指導・助言する。
- 配置が現職教員のみの場合、実習校担当教員との協議の下、各自が指導案に基づく授業を原則1時間以上実施する。
 - ※ 原則1時間以上の授業は、実習校の事情・院生の実習状況等を勘案して実習校で「授業をさせる、させない。させるなら何時間程度」を決定する。
 - ※ 各連携協力校では、教材研究や授業づくりのための検討時間の確保に努力する。(例えば、1日の内の1時間程度を設定するなど。)

5. 実習記録等について

- (1) 実習記録は、A4版の所定の用紙を活用し、実習日ごとに教育実習日誌を作成し、実習校担当教員へ提出する。また、10日間の全体をまとめた「省察記録」と「教育実習校の概要」を各連携協力校の実習終了後に定める期日までに大学院指導教員へ提出する。
- (2) 提出された実習記録等は評価資料として活用する。(実習記録は、評価終了後に大学院指導教員から実習生へ返却する。)

6. 評価について

- 評価については、評価項目・基準に照らし合わせて、実習校担当教員と大学院指導教員との協議の上、大学院指導教員が評価する。各連携協力校では「課題発見実習Ⅱ」評価表を基に実習校担当教員としての考えを実習連携部会で大学院指導教員と協議する。
- (1) 「課題発見実習Ⅱ」の評価表は実習期間前の事前協議に大学院指導教員が持参し、実習校担当教員へ渡す。

7. その他

- (1) 実習原簿について
実習生の実習原簿は7月末までに各校に大学院から各連携協力校に送付または事前打合せに持参する。連絡や事前打ち合わせ、指導計画表作成のための参考資料とする。
- (2) 出勤簿について
出勤簿は実習生が持参し、実習中各自で管理する。出勤時に捺印する。

【 課題発見実習Ⅱ前期・後期 】 教育実習校の概要

学校名			
所在地	〒	Tel	
校長名	先生	担当教諭名(学級)	先生
教頭(副校長名)	先生	担当教諭名(学級)	先生
教職員	合 計 名 (男子 名) (女子 名)		
学級数	()学級	児童・生徒数	(男子 名)(女子 名) 計 名
学校の特徴 ・学校の沿革 ・地域の特徴 ・その他			
教育方針 ・教育目標 ・経営方針等 ・その他			
備 考 ・課題研究テーマとの関わり ・実習校に関する所感など			
			大学院指導教員検印

※ 実習記録に添えて大学院指導教員へ提出する。

月 日 曜日 天候()				
研究事項 実習の着眼点等	----- ----- -----			
内 容(講話・実習授業・授業観察等の概観)				
始業前				
1校時				
2校時				
3校時				
4校時				
給食指導				
昼休み等				
5校時				
6校時				
終業時 (部活動など)				
一日の所感	----- ----- ----- ----- -----			
担当教諭の助言 ※口頭での指示等 を院生が記録する。	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%;"></td> <td style="width: 15%; text-align: center;">実習校 担当教 員の検 印</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">印</td> </tr> </table>		実習校 担当教 員の検 印	印
	実習校 担当教 員の検 印	印		

※ 罫線等は必要に応じて増やして利用のこと。但し、A4版形式とする。

「課題発見実習Ⅱのまとめ」

「課題発見実習Ⅱ」終了後、下記の観点にしたがって、レポートを提出する。レポートの形式はA4サイズ縦型横書き(45字×40行)、4枚以内。提出期限までにメールに添付して速やかに提出する。

※参考文献等を必ず使用し、【注】として記入すること。

提出期限： 2月 日() 17時15分 ※以降は提出遅刻になる。

提出先： 大学院主・副担当教員、連携協力校担当教員、実習委員長

観点1: 実習校での観察・参加を通して、自己の知識や技能の改善点をまとめる。

観点2: 自己省察に基づき、自己の課題研究のこの時点での成果と課題をまとめる。

観点3: 研究課題に対する見通しをもった解決策をどのように構築し、実践したか。

「課題発見実習Ⅱ」評価表(現職院生用)(琉球大学教職大学院)

平成31年 月 日

学籍番号		氏名	
実習校①	立	学校	年 組
実習校②	立	学校	年 組
出欠等の状況			
出席すべき日数	20日		
出席日数	20日	欠席日数	0日
遅刻日数	0日	早退日数	0日

評 価 項 目・基 準		評 価
自己 省察力	・ 実習校での観察・参加を通して、自らの実践上の課題解決への試行等から、どの程度具体的かつ明確に成果と課題を把握できたかどうか。	A B C D F
課題の 明確化	・ 自己省察に基づき、自己のテーマを選定できたかどうか。	A B C D F
課題 解決力	・ 研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を模索し、見通しをもった解決策を提起し、実践することができたかどうか。	A B C D F
実習期間	平成30年 月 日～ 月 日	※10日間
	平成31年 月 日～ 月 日	※10日間
総合判定	A B C D F	取得単位数 4単位
高度教職実践 専攻長 氏名・印	吉田 安規良 印	

「課題発見実習Ⅱ」評価表(学卒院生用)(琉球大学教職大学院)

平成31年 月 日

学籍番号		氏名	
実習校①	立	学校	年 組
実習校②	立	学校	年 組
出欠等の状況			
出席すべき日数	20日		
出席日数	20日	欠席日数	0日
遅刻日数	0日	早退日数	0日

評 価 項 目・基準		評 価
自己省察力	・ 実習校での観察・参加を通して、自己の知識や技能の改善点を、どの程度、具体的かつ明確に知ることができたかどうか。	A B C D F
課題の明確化	・ 自己省察に基づき、自己の課題研究を深め、この時点での成果と課題を明確にできたかどうか。	A B C D F
課題解決力	・ 研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を模索し、見通しをもった解決策を提起し、実践することができたかどうか。	A B C D F
実習期間	平成30年 月 日～ 月 日	※10日間
	平成31年 月 日～ 月 日	※10日間
総合判定	A B C D F	取得単位数 4単位
高度教職実践 専攻長 氏名・印	吉田 安規良 印	

【 インターン実習 】 教育実習校の概要

学校名			
所在地	〒	Tel	
校長名	先生	担当教諭名(学級)	先生
教頭(副校長名)	先生	担当教諭名(学級)	先生
教職員	合 計 名 (男子 名) (女子 名)		
学級数	()学級	児童・生徒数	(男子 名)(女子 名) 計 名
学校の特徴 ・学校の沿革 ・地域の特徴 ・その他			
教育方針 ・教育目標 ・経営方針等 ・その他			
備 考 ・課題研究テーマとの関わり ・実習校に関する所感など			
		大学院指導教員検印	

※ 実習記録に添えて大学院指導教員へ提出する。

インターン実習 実習日誌 氏名 _____ (日目)

月 日 曜日 天候()			
研究事項 実習の着眼点等	----- ----- -----		
	内 容(講話・実習授業・授業観察等の概観)		
始業前			
1校時			
2校時			
3校時			
4校時			
給食指導			
昼休み等			
5校時			
6校時			
終業時 (部活動など)			
一日の所感	----- ----- ----- ----- -----		
担当教諭の助言 ※口頭での指示等 を院生が記録する。	<table border="1"> <tr> <td>実習校 担当教 員の検 印</td> <td>印</td> </tr> </table>	実習校 担当教 員の検 印	印
実習校 担当教 員の検 印	印		

※ 罫線等は必要に応じて増やして利用のこと。但し、A4版形式とする。

「インターン実習のまとめ」

「インターン実習」終了後、下記の観点にしたがって、レポートを提出する。レポートの形式は A4 サイズ縦型横書き(45 字×40 行)、4 枚以内。提出期限までにメールに添付して速やかに提出する。

※参考文献等を必ず使用し、【注】として記入すること。

提出期限： 月 日() 17 時 15 分 ※以降は提出遅刻になります。

提出先： 大学院主・副担当教員、連携協力校担当教員、実習委員長

観点1： 実習校での協働からなる実習を通じた自己の課題研究に対する解決のための見通しについて。

観点2： 年度開始時期から学級の安定化に向けた重要な時期に学級担任と協力してどのような教育活動を実践することができたか。

観点3： 年度開始時期の学校の総体を体験的に学修した上で、自己の課題解決(学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など)のための対応策をどのように立案し、それを実践することができたか。

「インターン実習」評価表(学卒院生用)(琉球大学教職大学院)

平成 年 月 日

学籍番号		氏名	
実習校名	立	学校	配属 年 組
出欠等の状況			
出席すべき日数	10日		
出席日数	日	欠席日数	日
遅刻日数	日	早退日数	日

評価項目・基準		評価
自己省察力	・ 実習校での協働からなる実習を通して、学生各自が設定した課題と照らして解決のための見通しをもつことができたかどうか。	A B C D F
協働力	・ 年度開始時期から学級の安定化に向けた重要な時期に学級担任と協力してより良い教育活動を実践することができたかどうか。	A B C D F
教育実践力	・ 年度開始時期の学校の総体を体験的に学修した上で、学生各自が設定した課題解決(学習指導や児童生徒指導の方法および学級、学校の経営など)のための対応策を立案し、それを実践することができたかどうか。	A B C D F
実習期間	平成 31年 4月 日～ 月 日 ※10日間	
総合判定	A B C D F	取得単位数 2単位
高度教職実践 専攻長 氏名・印	吉田 安規良 印	

【 課題解決実習 】 教育実習校の概要

学校名			
所在地	〒	Tel	
校長名	先生	担当教諭名(学級)	先生
教頭(副校長名)	先生	担当教諭名(学級)	先生
教職員	合 計 名 (男子 名) (女子 名)		
学級数	()学級	児童・生徒数	(男子 名)(女子 名) 計 名
学校の特徴 ・学校の沿革 ・地域の特徴 ・その他			
教育方針 ・教育目標 ・経営方針等 ・その他			
備 考 ・課題研究テーマとの関わり ・実習校に関する所感など			
			大学院指導教員検印

※ 実習記録に添えて大学院指導教員へ提出する。

課題解決実習 実習日誌 氏名 _____ (日目)

月 日 曜日 天候()			
研究事項 実習の着 眼点等		
		
		
	内 容(講話・実習授業・授業観察等の概観)		目的区分
始業前			
1校時			
2校時			
3校時			
4校時			
給食指導			
昼休み等			
5校時			
6校時			
終業時 (部活動等)			
一日の所感		
		
		
		
		
助言や口頭 での指示等 を院生が記 録する。		実習校 担当教 員の検 印	印

※ 課題解決実習の目的AまたはBを「目的区分」に記入する。

※ 罫線等は必要に応じて増やして利用のこと。但し、A4版形式とする。

「課題解決実習」評価表(学卒院生用)(琉球大学教職大学院)

平成 年 月 日

学籍番号		氏名	
実習校名	立	学校	配属 年 組
出欠等の状況			
出席すべき日数	20日		
出席日数	日	欠席日数	日
遅刻日数	日	早退日数	日

評価項目・基準		評価
自己省察力	・ 実習校での協働からなる実習を通して、研究課題の解決策を示し、授業実践に積極的に取り組み、省察し、どの程度、具体的かつ明確にできたかどうか。	A B C D F
課題解決力	・ 研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を提起し、実践することを通して研究課題に対する答えを示すことができたかどうか。	A B C D F
教育実践力	① これまでの大学院での実習を含めた学修を通して、研究課題の解決に向かう授業実践を広い視野から創造して実践することができたかどうか。 ② 自らの教育実践力を自己評価して向上のために必要な手立てを考え、実行することができたかどうか。 ③ 児童生徒に育てる力を見取るために必要な授業実践をする力(教材研究・実践・評価・反省等を自ら行う力)を授業に反映できたかどうか。 ④ a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導などの実践的技能が、即戦力として通用するレベルにあるか。	A B C D F
実習期間	平成 31年 月 日～ 月 日 ※20日間	
総合判定	A B C D F	取得単位数 4単位
高度教職実践専攻長 氏名・印	吉田 安規良 印	

「課題解決実習」評価表(現職院生用)(琉球大学教職大学院)

平成 年 月 日

学籍番号		氏名	
実習校名	立	学校	配属 年 組
出欠等の状況			
出席すべき日数	20日		
出席日数	日	欠席日数	日
遅刻日数	日	早退日数	日

評価項目・基準		評価
自己省察力	・ 実習校での協働からなる実習を通して、研究課題の解決策を示し、授業実践に積極的に取り組み、省察し、どの程度、具体的かつ明確にできたかどうか。	A B C D F
課題解決力	・ 研究課題に対して、大学院での学修を基に解決策を提起し、実践することを通して研究課題に対する答えを示すことができたかどうか。	A B C D F
教育実践力	① これまでの経験と大学院での実習を含めた学修を通して、研究課題の解決に向かう授業実践を広い視野から創造して実践することができたかどうか。 ② 自らの教育実践力を自己評価して向上のために必要な手立てを考え、実行することができたかどうか。 ③ 児童生徒に育てる力を見取るために必要な授業実践をする力(教材研究・実践・評価・反省等を自ら行う力)を授業に反映できたかどうか。 ④ a.教科等の指導、b.学級経営、c.児童生徒指導などの実践的スキルは、他の教員の模範となるレベルにあるか。	A B C D F
実習期間	平成 30年 月 日～ 月 日 ※20日間	
総合判定	A B C D F	取得単位数 4単位
高度教職実践専攻長 氏名・印	吉田 安規良 印	

琉球大学教職大学院教育実習に関する問い合わせについて

問い合わせ先

琉球大学大学院教育学研究科(教職大学院)

教育実習委員会 白尾裕志

〒901-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

電話 098-895-8342(直通・FAX 兼)

Eメール shirao@edu.u-ryukyu.ac.jp